

二〇一六年一月三日

日矢さして大和の嶺々も春まだか  
仁王門をくぐるや否や風花す

ほたる よし女 明日香

一望の枯葦原に風ねたる  
鶯もち並ぶ菓子舗の明るさよ  
満帆に春風はらみ外海へ  
湯気の立つ屋台に長蛇広場凍つ  
寝転べば至福や日射す枯芝に

花舗いまし溢れんばかり春の色  
二〇二六年一月三〇日

群鳩の虜となりぬ福詣  
朝焼けに影絵散らしや鶴帰る

公園のベンチ落葉が席巻す  
愛のチヨコ赤が氾濫菓子売場  
悴める手に息吹きつ人を待つ  
愛用す祖母の手縫のちやんちやんこ

二〇一六年一月二九日

金柑の豆電球のごとたわわ  
裸木に透けて落ち行く夕日かな  
銀輪で丘駆け上る寒風子

二〇二六年一月二八日

老幹の冬芽親しき国寿かな  
泳がせて洗ふ水菜や金盥  
旅の地図ひろげてなぞる春炬燵

康 あ よ  
子 ひ し  
女 る ん

嵩高く雪を被りし六地蔵  
高窓の氷柱を射抜く夕日かな  
二二、年二月二日

天へ鉢立ちてセコイアや春を待つ  
寝ねやらず枕辺に聴く寒の風  
日脚伸ぶ畳目しるき奥座敷  
躊躇せる足跡と見し雪の路地  
二〇二六年一月二六日

愛正 海晏 ほたる こすもす よしゆ こすもす こすもす

昨夜の雪庭を白変して去りぬ  
ひとつ星残し寒暁広がりぬ  
寒釣りの不撓不屈や風の崖  
鉄橋の果にとどまる寒落暉

押せば回る睡蓮鉢の厚氷  
繰返すバツク前進除雪中  
旅苞にさるぼぼを買ふ雪の飛騨  
風花す消息葉書読みをれば  
紅梅のひと枝が似合ふ益子燒

一〇一六年一月二五日

毎日句会みのる選・二〇一六年二月二日